

「言葉による見方・ 考え方」を育て 働かせる授業デザインを



和歌山信愛大学・教授

小林康宏

資質・能力育成のカギは何か

中学校での二十九年版学習指導要領の完全実施まで残り一年を切りました。この改訂では、周知のように、生徒に「資質・能力」の育成をすることが求められています。

では、「資質・能力」とはいったい何でしょうか。ひとことでいえば、「何ができるようになるか」（中学校学習指導要領解説国語編 第一章総説）という問いに対する答えです。つまり「〇〇ができるようになる」ことです。

たとえるなら、「少年の日の思い出」を学んだ生徒が、チョウを一つ一つ潰す「僕」の絶望的な心情を解釈するばかりではなく、解釈したときに使った読み方を使い、他の作品も読み解く力を付けることが求められているのです。

そして、資質・能力を身に付けるための授業改善の観点となるのが「主体的・対話的で深い学び」です。このうち「深い学び」は「習得・活用・探究」という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考

え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう『深い学び』（中学校学習指導要領解説総則編 第一章第三の二）と説明されています。

ここで注目するのは、様々な学習活動や学習過程の中で共通して働かせていく「見方・考え方」です。

それでは、「見方・考え方」とは一体何でしょうか。ひとことでいえば、『どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか』というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方（中学校学習指導要領解説国語編 第一章総説）です。「見方・考え方」は各教科等の目標の筆頭に挙げられています。資質・能力を身に付けていく授業改善を進めていくための重要なカギなのです。

国語科では、「言葉による見方・考え方」として位置づけられています。「言葉による見方・考え方」は、中学校学習指導要領解説国語編（第二章第一節）では、「生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであ

図1 言葉への自覚の高まり

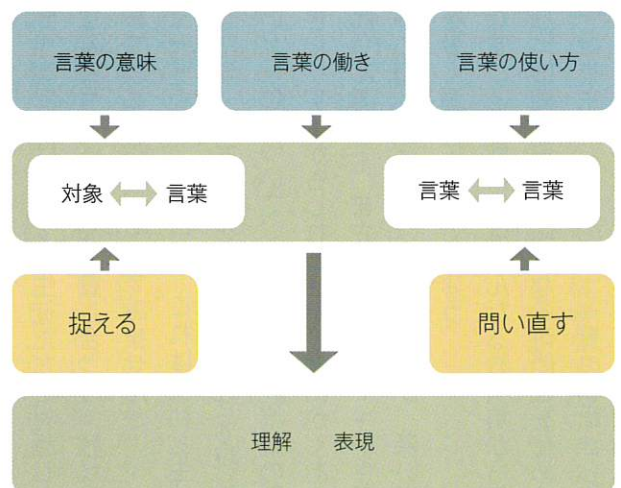
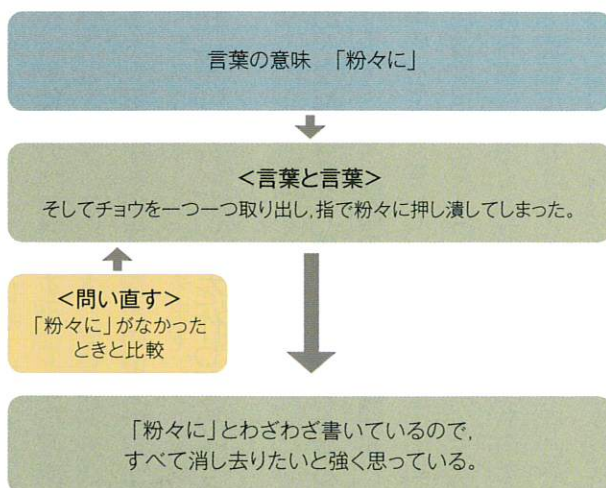


図2 言葉のあるなしの比較で分かる!



ると考えられる」と説明されています。

この説明が非常に難解であるため、具体的に何をどうするのかのイメージがもちにくく、現場に浸透していかない一因となっています。

図式化すると前ページ下段図1のようになり、「少年の日の思い出」の最後の一文を解釈する場合を当てはめると図2のようになります。

最後の一文の「粉々に」の意味に着目し、「粉々に」がなかった場合と比較することで、テキストを捉え直し、『粉々に』とわざわざ書いているので『僕』はチヨウとの思い出をすべて消し去りたいと強く思っている」といった解釈が生まれます。

これらの結果、文章中の言葉の有無を比較することにより、解釈を深めることができるという自覚が生まれていくという流れです。

さて、「言葉による見方・考え方」を働かせる授業への改善の動きが加速していかない要因が、もう一つあると思います。

「初等教育資料」（東洋館出版社・令和元年九月号）には、「観点別学習状況の評価の対象はあくまでも各教科で育成を目指す資質・能力をどの程度身に付けているかどうかであり、『見方・考え方』を働かせているかどうか自体を評価の対象とするものではない」（p5）とあります。

この文章はこの後、「見方・考え方」を働かせる授業づくりの重要性について述べているのですが、「見方・考え方」は指導事項ではありません。そのため、指導する必要がない、また、指導事項にないので、何を指導したらよいのか分からない、といった思いが学校現場の中にはあると思います。

けれども、やはり重く受け止めたいのは中学校学習

指導要領解説国語編（第一章第一節）に記載されている、「見方・考え方」は「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において『見方・考え方』を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮される」とが求められる」という一節です。

指導者は、教師の専門性を発揮し、資質・能力育成の力ギとなる「言葉による見方・考え方」を働かせ、育てる授業づくりに本気で取り組みたいものです。

授業づくりの七原則

「言葉による見方・考え方」（以下「見方・考え方」）は、当該の授業の中だけで働かせていけばよいというものではありません。前述の「学習や人生において『見方・考え方』を自在に働かせることができるようにする」ということから明らかのように、「見方・考え方」を働かせ、「育てていく」という意識が授業では必要です。

そのためには、例えば一年では「飛べ かもめ」（杉みき子）で人物の心情の読み取り方について学び、学んだ「見方・考え方」を使い、「さんちき」（吉橋通夫）を読み、定着させていく方法があります。

また、四単元では説明文を読み、結論と根拠の関係など論証を吟味することについて学び、続いて、根拠を明確にして考えを述べる活動を行う複合単元を取ることにより、「読むこと」領域で学んだ「見方・考え方」を「書くこと」領域で活用させていき、定着させてい

く方法もあります。

以上紹介したのは、ひとつの単元での学習を通じて「見方・考え方」を働かせ、育てていく方法です。

では、一時間の授業の中で「見方・考え方」を働かせ、育てていくにはどのようにしたらよいでしょう。

私はそのための授業の展開には七つの原則があると考えています。

- 原則一 学習課題の設定
何を目指すのかはっきりさせる
- 原則二 学びの見通しの共有
見通しの共有と学習過程の提示
- 原則三 個人追究
個で取り組む機会を設ける
- 原則四 協働追究
対話の働きを使い分けて行う
- 原則五 精査・推敲
対話を踏まえた個人思考
- 原則六 振り返り
学習内容・方法・対話を振り返る
- 原則七 活用・定着
価値付けし、活用を意識させる

大まかにいえば、学習課題を設定した後、課題を解決するための「見方・考え方」と活動の仕方を共有し、個人追究・協働追究を経て、再び個人に還って学びを磨き上げ、振り返り、活用への意識をもつという流れです（詳細については拙著『言葉による見方・考え方』を育てる！子どもに確かな力がつく授業づくり7の原則×発問&指示』・明治図書出版、または『小学校

国語「見方・考え方」が働く授業デザイン——展開7
原則と指導モデル40+a・東洋館出版社をご参照く
ださい。

この七原則の中でも、「見方・考え方」を働かせ育
てていくための核となるのが「原則二」学びの見通し
の共有」です。

「見方・考え方」は意識して働かせていく中で慣れ
ていったり、磨かれていったりするものです。

生徒が働かせることを期待する「見方・考え方」を
まず顕在化させるのが、原則二の段階です。

「見方・考え方」あれこれ

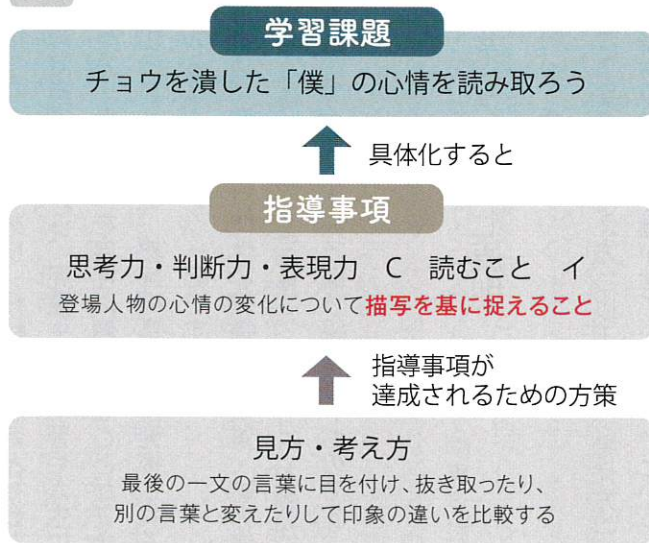
「学習課題」「指導事項」「見方・考え方」は、図3
のような関係になっています。

生徒が本時の達成を目指していることが「学習課題」
です。学習課題は本時の「指導事項」が具体化したも
のです。そして学習課題を達成し、その後も様々な課
題に対して働かせていく方略が「見方・考え方」です。

授業で肝心なことは学習課題の解決を大切にし、そ
のための方略として「見方・考え方」を位置付けるこ
とです。あくまでも「見方・考え方」を身に付けるこ
とが授業のねらいではありません。

以下、学習課題とその達成のための「見方・考え方」
を例示します。

図3



「少年の日の思い出」で学習課題を「伏線の効果を
感じ取る」と設定し「見方・考え方」を『闇』に
関する表現を前半と後半から取り出し、関係付ける
とします。

生徒からは、「前半では『彼の姿は、外の闇からは
とんと見分けがつかなかった』とあり、後半では『大
きなとび色の厚紙の箱を取ってき、それを寝台の上に
載せ、闇の中で開いた。そして……』とあります。『闇』
のもつ暗いイメージが重なっています。」といったこ
とが発見されます。そして、「前半の表現はこれから暗
い話が始まることの暗示であることを意識させていき

ます。

「黄金の扇風機／サハラ砂漠の茶会」で学習課題を
「二つの文章はなぜ対照的な主張になっているのか」
と設定し「見方・考え方」を「観点を決めて具体例の
内容や考察の付け方を比較する」とします。

「外国で出会った人の姿」を観点にすると「黄金の
扇風機」からは「一九九〇年代のエジプトでは金色の
飾りを好んでいた」、「サハラ砂漠の茶会」からは「遊
牧民が自分の気に入った花を遠来の旅行者にプレゼン
トする」といったことが取り出されます。いくつかの
観点から取り出された具体例や考察の付け方を比較す
ることで、主張の違いが生まれた理由を探っていくこ
とができます。

「故郷」で学習課題を『私』と再会したルントーは
どのような人物になっていたのだろう」と設定し、「見
方・考え方」を「ルントーの会話文に入る『……』の
内容を具体化してみる」とします。

再開の場面では、「どんな様……」を含めて十か
所「……」が登場します。小説の展開に合わせて考え
ていく中で、ルントーの辛酸や屈折が浮かび上がって
きます。

「見方・考え方」は「思考力・判断力・表現力」の
指導事項には具体的に登場しません。例示したものは
教科書の「手びき」や、その『たすけ』を使ったものです。
また、「言葉の力」も大いに参考になります。

研修、情報交換等も通じて、教師側が「見方・考え方」
を豊かにし、教材やねらいに応じ学習課題を設定して
いきたいものです。